



近松會雜誌 第五編



第六

真合 沢口
竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中

第十

竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中

三味線

十日 祥日

竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中



大夫 近松門左衛門

傾城阿波鳴門

又切物



第二

真合 沢口
竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中

第六

真合 沢口
竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中
竹中 竹中 竹中

上野の... 阿波の... 鳴門の...
近松門左衛門... 傾城阿波鳴門...
又切物

會 告

本會事業たる近松翁墳墓修築保存並に文庫建設に着手し彌々其の筋の認可を得て左記規程により寄附金を募集す

●募集金處分規程

- 一 寄附金は壹圓以上とす
- 一 寄附金は寄附者の指定せられたる費目に充つ
- 一 寄附金は本會々計監督渡邊庄助監督の下に大阪市東區今橋合名會社増田銀行に預け入ること
- 一 金額拾圓以上の寄附者は氏名を石に刻すること
- 一 金額拾圓以下の寄附者は本會芳名録に記し文庫に永遠備付くること
- 一 寄附金は募集人に於いて申込書のみを受取り現金は更に渡邊會計監督より徴集す
- 一 寄附者は本會開設の近松文庫、講苑會、演藝會等に無料觀覽を爲すことを得
- 一 寄附者の氏名は本誌上に廣告す
- 一 墳墓玉垣に署名する大小の柱數及金額左の如し
 - 一 玉垣大柱 壹本 金拾五圓 百五十本
 - 一 同 小柱 壹本 金拾圓 三百八十本

右 廣 告 候 也

近 松 會 事 務 所

近松會雜誌第五號要目

●本會記事

記事 會員名簿(承前)……………(一)

●傳 記

六代目染太夫自傳(つらき)……………(三) 竹本叶太夫(寄)

●松葉籠

粟林子墳墓考證(二)……………(五) 小野利教

曾根崎心中の研究……………(七) 東京 鈴木春浦

宇和島みやげ(下)……………(三) 岡田翠雨

假名手本忠臣藏について……………(四) 紅の家 おいろ

双蝶々の由來……………(六) 小野稻洲

鎗權三について……………(八) 小野棟華

●反古しらべ

狂歌(三首)……………(九) 故 栗崎亭木端

●詞の花

漢詩(先代萩、粟林子、四首)……………(九) 橋本海關外三氏

和歌(忠臣藏)……………(三) 宮脇 義臣(寄)

狂歌(假名手本忠臣藏)……………(三) みやび會(投)

●時 報

十一月の文樂座……………(三) 小野稻洲

十一月の堀江座……………(四) 同

松葉家運益會(寫真版入)……………(三) 吟

益田福昇氏追善會(寫真版入)……………(七) 吟

田中燕子翁追善會……………(三) 馬

鶴龜會のぞ記……………(三) ていくわ

堀江座の新作淨瑠璃……………(三) 一 記

大隅の咽しらべ……………(三) 馬

●堀江座義大夫會◎花くらべ(寫真版入)◎其他◎狐々會

◎古淨瑠璃本展覽會

●通 信 欄

●圖書購入(細川芳之助氏)

●會員消息

●寄贈書目

●廣告及會告

●附 録

成相山觀世音靈驗記傘松茶店の段……………香川 蓬州

安宅關勸進帳講義(第一回)……………青 瑠 璃 漢

近松會雜誌 (第五號)

本會記事

十月十九日緒方副會長、渡邊會計監督、岡田、齋藤、加藤、宮北、井上の各評議員、小野幹事等、久々知村に到り、墳墓地域を三百坪と定め、境界に杭をうたせ、標柱を建てたり。尙同時に有志の寄附金を募集することを決議し、此程大阪兵庫兩府縣知事へ出願したり。

會員名簿 (第三號のつゞき)

特別賛助員

神戸 服部 一三

賛助員

京都 竹内 栖鳳
 伊豫 尾崎 通信
 同 山村 豐次郎
 同 天狗 會
 大阪 竹内 淺吉

同 三浦 おいろ

大阪 豐澤 團左

同 香川 倫三

同 豐澤 龍七

同 近藤 破笠

同 豐澤 友松

神戶 竹本 蟠龍軒

伊豫 西川 哲三郎

同 豐澤 仙二

同 藤田 達吾

同 岐阜 渡邊 月窓

同 堀尾 秀之助

大阪 丹波 本郷 文海

同 西川 久治

普通會員

(第三號のつゞき)

土佐 朝日 治之助
 嶺 富吉 北堂
 大阪 岡田 米枝
 同 多屋 昌藏
 同 兒島 安次郎

清水氏を始め、福田猪之助、鹽瀬新二郎、小池孫市、若松吉兵衛、谷尾傳兵衛の諸氏、其他軒敷を

れ、あり。斯て荒木氏は此の佛事につき、爰ぞ實大夫の勘氣赦免の時至れりと、直様清水氏へ談合し、扱て佛事の當日に相成れば、荒木氏は清水氏と同道して實大夫召連れ、赤阪の田穂庵へ趣き、實大夫を蔭の間にひかへさせ、夫婦へ挨拶事終りて、二人とも口を揃へ、けふの佛事を幸ひ、何卒實大夫の勘氣赦しくれよとの平押しに、田穂家は恩儀有る人の言といひ、且内實いね女仲人の事あり、日柄といひ旁以て違變もならず、兎角も承知致せしかば、早速實大夫を呼出し染太夫夫妻に對面させ、勘氣赦免の上何事も是迄通りと相成りたり。荒木氏は師匠に重ねて云はるゝやう實大夫も是より形をかへ、至急手袂き家を持せ度と頼まれるれば、師匠も大に悦び一禮を述べらるゝ程なく佛事の時刻もうつり、荒木清水實大夫も其

座に連り供養もすみて、一同も座をひらき、元の神田へ歸りける。

(九) 實大夫傳馬町新宅出來

の事

荒木氏は和談調ひし事家内へ咄されしに、御新造始め子息格太郎氏も悦び、此上は取敢ず實大夫に一家を持せんとて詮議中、茲に稻荷平兵衛と云顔役の仕事司あり。此平兵衛の母親は稻荷のお婆さんと云ふ大女にて、年六十の大通り者なり。此人元來實大夫を大の最負なれば荒木氏の頼にて、實大夫の親分に成り呉れ、此家の戸籍に加はりて、傳馬町の裏店へ別宅する事になり、裏家ながらも造作雜費に參拾金も入用をかけ、追々普請出來り。扱此稻荷の宅と、實大夫の新宅とは、道程漸く二丁ばかり、荒木氏の宅からは凡半道も隔たれば、手近くの稻荷より諸事を請込み入用の金子を

も取替て日々世話をなしけるが、造作終りて、荒木旦那を始め皆々新宅に打寄、文政十三寅年壬三月二十三日茲に目出度家轉祝儀納まりける。

巢林子墳墓考證

小野 利教

(二) 日昌上人と正本屋

九右衛門

廣濟寺はもと天台の巨刹で、中ごろ禪刹となり、日昌上人に及んで法華宗となつたのである。實に日昌は中興の開山であつて、學徳圓滿衆庶の歸依を得たもので、其所生は大坂寺島松島の船問屋尼崎屋吉右衛門である。尼崎屋は最初銅座に居て後に寺島に移つたのだといふ、この尼崎屋の閑居、即ち隱居所が大富豪巢林子の住んで居た所であつて

松葉籠

幾多彩華艷麗の文章は此所で作成せられたのである。その作品を陸續版行した正本屋山本九右衛門の父は、日昌上人と非常に近親入魂の仲であつた殊に父治重は法華經受持信者であつて、本堂はその一建立になり、多額の金銀財物をも寄附したのである。

現に、金波院受樂日久居士、正興院受貞日持大姉と刻せる位牌があつて、甲は寛保元年辛卯年十月十三日、乙は正徳四甲午年四月三日と記してあつて即ち治重夫婦の靈位である。又木像をも納められたしい。其巨大なる墓石は、開山日昌の碑と相並んで樹つてをって、不明ながら左の如き碑文が讀まれる。

妙法蓮華經者十方三世之諸佛縁之覺母也五字之中誇旋天地籠牽法界本化之薩埵神降日域但弘唱題行靡然而如風偃草東西諸州專勤此行蓋聞山本氏治重者元維爲權門人深信受經王厚親近日昌捨銀寶成本願人遠本堂建立時不厭風雨寒暑數百日

父と趣をかへて禪宗になつてをる。近松門左衛門は作者の氏神なり、年來作り出せる淨瑠璃百餘冊其内當らぬありと雖も、作意文章悪しきはなく、今の作者等みな近松のいきかたを手本とし書綴るものなり。此道を學ぶもの近松の勳、晝夜之を思へかし、あゝまたと有るまじきををさるべし、と、讚歎しながら何故に同じ埜域に骨を埋めなかつたのかといふ事である。元來一鳳は奇人であつて有福な身で在りながら江戸に行くこと態と裏屋に旅宿して、來訪者に貧窮の體裁を見せたり、奇抜突飛な談話をして人を驚かした例も多く、彼の上田秋成は生田傳八郎の子だといつて世に笑はれたのも一つの證據で在らう。近松翁は享保九年十一月に没して、正本屋は同十六年五月に没してをるから、七年の差がある。行年も六十七で、近松翁よりは四年の短命であつた、生前の改宗もかゝる奇行者とすれば不思議はないが、親と行方を異に

之運歩不懈一日而造立之功則足而後永寄附田畔、家屋安置自己之像遺命子曰爾慎爲當時勿無現吾木像應猶現在言訖塞眼目于時老年七十三載也矣孝子山本九右衛門重時承命繼業營○廣濟寺五祖日實誌

併しこの碑石は重時が老年に建てたものである。斯の如き縁故があるから、開山列名縁起にも、百人講にも、近松翁と共に署名して居る。元來正本屋の父治重は武州忍藩の太夫で在つたが、致仕後浪華に住みて商估となり、元久々知が忍領で在つた上に、妙宗信者といひ、おまけに近松翁と入魂で、又日昌と親近だといふ廻り重なる縁から此處に埋骨したのである。そこで余輩の疑つたのはこの九右衛門である。即ち大阪心齋南四丁目の書林版元で、戯作を好み、西澤一鳳と號して豊竹座の作者となり、一時は莫林子と當りを競ふたが、後には提携することに成つたのに、墓は大坂下寺町の大蓮寺に在つて、常譽貞寂禪定門といつて

したには何等かの理由も在るのであらうに、此の間消息を語るものゝないのは遺憾である。

曾根崎心中の研究

(尾上樂之助所演を見て)

東京 鈴木 春浦

先にその地より遙々東京へ藝道修業とありて上られたる青年俳優尾上樂之助は、未だ曾て誰も手を附けしといふことを聞かざる近松の「曾根崎心中」を舞臺に掛けんと思ひ起し、數回の熟讀を経て自ら立案し、自ら平野屋徳兵衛に扮して、宮戸座の晝の二番目に出したり。

吾人はまだうら若き樂之助が一人抽んで、而して以てこの近松物を研究的態度に演じられたるを多すとすると共に、優が熱心の有様を書き記して貴會に注進せんとす。

先づ吾人は斯の如き企と聞き多大の同情を以て

優の舞臺を見たるに、豫期以上近松翁が作そのもの、俛を偲ぶるゝこの出来得たるは、近頃の観劇中愉快この上もあらざりき。

優が立てたる場面といふは、最初に「生玉境内茶店」それより「天満屋店先」同じく座敷「蜷川九平次殺」、また元の「天満屋座敷」を大詰としたる五場なりしを、その筋に於ては、大詰の一場は、既に道行を繰越したるものなればといひて許可されざるなり。

尤も優はこの事のあらんと豫め期して道行の場は省きて匂を示さんと欲せしも右の次第なれば、吾人見物は非常に物足らぬ感じをなしたり。將又優が爲には齒痒きこと、察せられたり。

こゝに於て吾人は舞臺に登らざる場面の模様は同人より親しく聞き苦心の程を認めれば、今左に實況を略述せん。

樂之助は如何にして同人等が手を付けざりし此

一切の人々も出来得る限り元祿式に見ゆるやうに摸せり。

こゝへ天満屋お初女郎は大盡に連れられて出づるも、氣色すぐれず物業の體なり。附添ひし仲居太鼓は氣を揉めり。お初は思案なけれど徳……と口滑べらす、大盡は徳とは平野屋の徳兵衛が、なぞといふ。お初は徳は生玉の伯母、どつくり逢ふと打消していふ。皆々は徳に從ひて參詣すべく去る。お初は一人かこちて茶店へ忍ぶ。

油屋九平次と徳兵衛は連立ち出で、徳兵衛が九平次に貸金の催促す。二人の話の中に、お初は徳兵衛と、そつと顔見合す。九平次はきつと金拵へて來ると行く。跡にて二人は本文の如く身の行末を語らひ、お初は「死ぬるをたのゝ死出の山、三途の川はせく人もせかるゝ人もござんすまい」と心中をほめかす件あると、九平次はほろ酔加減にて「山寺の春の夕暮」と謠ひて出づ。お初は體を

の「會根崎心中」に手を掛けしといふ謂れといつば多くある近松翁の道行の中にも、この心中の道行の文句が大に氣に入りしといふにありて、其氣に入るまゝに一つ舞臺に登せて、その當時の有様心行き等を未熟ながらも寫し出さんと欲したるなりと。然れどもこれを脚本に仕立てるに就いては如何にして多くの見物に満足と與へしむることの出来得るかに苦慮すること少からずといふ。

故に勢ひ原形のまゝにては到底舞臺に登するの困難なるを見出し、原作の形を無にせざる以上の案を立てたりといふ。

先づ「生玉境内茶店の場」は、湯立の鳴物にて幕を明けたり。湯立は一名を素神樂といひて、人も知る如く信者が神へ湯を捧げて貰はんと頼む折、神官が神の葉へ湯を付けて蒔く時に神殿にて用ゆる太鼓といふを利かせしなりと。

仕出しの町人は派手なる衣裳を選り。その他

再び茶店の内に外す。これより九平次は二貫目の金借りた覺なしといひ、三月二十五日に印形を落したれば、この證文の日附は二十七日ゆゑ、拾ふて作りし謀判といひて町役人に雷同させて苦しめる。徳兵衛は騙られしと口惜しがる。こゝあたりは當時の若者の性根を好く現はしたり。

これにて大勢の野人馬に盗人騙者と言はれ叩かれ、九平次は仕済ましたりと逃げ、お初は大盡の駕籠にて送らる。跡に残る徳兵衛が眉間に疵を受くるは本文にはなけれど、見た目の上より割出せしと、又その血も殊に氣附かず自と知ることになり、地上の土を塗りて血止に間に合せ、衣裳など肩通しの袖を切りて腕組をなし、すごくと歸る哀れな態など工夫を凝らしたりといふべし。また九平次と言葉争そひのうちに證文の捺印をむしり取らせしなご優が注意に據れりと。

こゝの歸りは左右の茶店に、騒がせしを詫びる

心にて會釋し、すご／＼歸る有様は目もあてられぬ戀風の身に蜷川流れては「云々と本文を使ひての獨吟にて、疵を押へ「夜毎に燈す燈火は四季の螢よ雨夜の星か夏も花見る梅田橋」にて兩手を被りし編笠にあて、屈み形に引込みたり。

次の「天満屋店先の場」は道具の都合にて預かり直ぐに「座敷」にせり。床の「浮名をよそに洩さじと……夜の編笠徳兵衛」で徳兵衛は花道より出づ。編笠の紐の括してあらざるより前へ落ちて取るさまは紙治が河庄へ來たる時の花道にて脱ぎし草履を穿く心行を用ひしなど面白かりし。この床は本文上の巻の徳兵衛の出を轉用したるなり。お初と逢ふ件ありて天満屋の亭主はお初を呼んで出で異見をなす。そは徳兵衛は養子になる人なれば妻も持たん、さういふ人を思ふは男間男も同じなどいひ必ず短氣して私を泣かしてくるなどいふ。お初は身に染みた御異見と表をつくらへば、亭主

て、髻を擱まれ引廻されるはづみに脇腹に及刺さりて殺すに至り、死骸を見て自失の體は、さもあるべきと領かれたり。
前に述べし如く芝居はこれにて打出しに相成りたれど、左に出幕にならざりしあらましを記せば元の座敷へ徳兵衛は九平次を打果して、お初に逢はんものと戻る。女中お鍋は隣家に死したる人ありて叩鉦の音に寂しきを感じて奥へ入る。徳兵衛は盃洗の水を呑みてお初に九平次を殺せしを語る。徳兵衛は「どはいへ其方は十九の厄」、お初は「お前は丁度二十五の厄の祟り」など本文を割つて使ひ、又「あの天神の森で死なうか、いや／＼社を穢さば未來の罪、む、最期の場所はあの曾根崎」云々とあるが本文なんど、實際は天神の森にて心中せしなればとて「最期の場所はあの曾根崎、夜明けなば人目立つ、あの天神の森で死なうか」と改めしと。

は安心す。この所は矢張同翁の「重升筒」のおふさへの異見のさまを持ち込み用ひしと云ふか。

九平次こゝに遊んで出で、お初を相方に呼んで徳兵衛をさげすめば、徳兵衛は庭に忍んでゐて人知れず悔しき科を見す。お初は徳兵衛と顔見合し床の「互に物は言はねども肝と肝とに耐へつゝ」にて、お初は死ねばもろとも二人の間に思入ありと云ふ九平次の亂暴に亭主は驚きて、これを追出しこれより徳兵衛は九平次の跡を追ふに至る。
次は「蜷川の殺場」なれど、近松は九平次を殺して無きとて優は舞臺面とはいひながら。大に其潜越を謝してをられたり。

殺しは蜷川の背景なり。床の「吹き送る片側町も寝洗みて——こゝへ來かゝる千鳥足」にて九平次は酔歩躑躅と出で、一得あれば一失ありなど獨つぶやく、徳兵衛は跡追ひ駈け來りて、一刀を抜き放ら、餘りに芝居掛からざる程度の立廻りあり

それより床の「心も空も影暗く秋の名残りの草の露」より徳兵衛の「我より先にまづ消ゆと、定めなき世は稻妻か、それがあらぬか」の白の末に人玉が飛ぶ様を形を出さずして只心持にて示し見することとせしといふ。

お初は徳兵衛に寄添ひて、そのなんたるを聞けば、徳兵衛は「あれこそ人玉よ今宵死ぬるは我れの身とこそ思ひしに、先立つ人もありしよな」といひて、お初に本文の徳兵衛の「誰にもせよ死出の山路のよき伴ひ」を言はさしめたり。その以下の本文を抜きて、徳兵衛は「二つ連れ飛ぶ人玉をよその上と思ふかや、正しう御身と我が魂よ、お初は「なにのう二人の魂とかや、早や我々は死ぬる身か」といふ。又徳兵衛は「常ならば繋ぎ留めなんど歎かまじ、今は最後を急ぐ身の魂のありかを一つに住まん、お初仕度しや」、床は「この世も名残り、世も名残り死に、行く身を譬ふれば仇し

宇和島みやげ (下)

岡田 翠雨

紳士仲間の肩入

山村豊次郎氏は中々凝り性である、一日頼まれた事は跡へは引かぬ、況してや淨瑠璃は好きな道、何でも伊達に花をもたして歸らせねば二度と再度来てくれぬかも知れぬ、伊達の如き名物男がかゝる邊僻へ来てくれたのは我が宇和島の名譽である、と諸肌ぬいでの大肩入れ、乗込みの當夜直ぐに斯道の好事者に檄を飛ばして追手通の丸水樓に歓迎の宴を開いた、予は約の如く伊達太夫、吉三郎を伴れて夕刻から出かけて見ると山村氏は早やチャンと控へてゐる、引續き玉井安藏、尾崎通信、堀部正次郎、八阪屋源三郎、春日屋春水、堀部彦次郎などいふ屈指の名士參會して一座は忽ち淨瑠璃談で花が咲く、追々酔の廻るに伴れ、一くだり宛

が原の道の芝、一足づゝに消れて行く、夢の夢こそ哀れなれ」にて男女は髪を撫で付けなごして行かんとす。これにて下女に遮ぎらるゝは本文になきものといふ。つまり以下の趣向を上巻へ逆上ばらせて、道行をこゝの前後に示せしなり。

下女は寝る件あり、道行の「あれ數ふれば曉の七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生」を唄に使ひて夜更けの様の凄味を利かせ、徳兵衛は椽の下より、お初は中二階より、顔を出して見合するが「鐘の響きの聞きをよめ、寂滅爲樂と響くなり」云々を用ゐて、双方白無垢の姿になり、寢とぼけし下女を搦みて、上の巻の末文なる「死に、行く身を喜びし命の末こそ知れ」に戻して、男女は手に手を取りて落ち行くに終るなりと。

でも陰らねば胸が好かぬと注文する人のあるにまかせ絲の仙市を呼びに遣る、席にはんべる藝妓ども、久し振で大阪仕入の三味線が聴かれると大喜び、頓て仙市が来る、露拂は玉井翁の酒屋、續いて堀部正の合邦、尾崎長の玉三など取りんぐに自慢の咽喉を聞かせる、かうなつても伊達も吉三郎も眼中にない、素人の愛敬は押し強い處にある何しろ稀らしい牙わた撥音がするので樓の外は人の山、去らでも土地の新聞で盛んに書き立てた伊達の人氣は此の歓迎會によつて一段の發展を爲し町廻りの際などは門並老幼群を爲し實に此の土地には稀有の事であつた。

伊達太夫の揮毫

伊達太夫は仲間での物知り、殊に筆札が甘いゆゑ予は此の席で一妓に向ひ戯れに此の人は畫も書も甘い何か書いてもらへイヤこんな席では失禮ぢや

統を持つて宿屋へ行けといつたところ妓は之を信じて翌朝子が伊達の宿舎龜屋にゐる處へ統を持つて遣つて来た、之を傳聞して吾れも／＼と唐紙や畫絹を持ち込む者が多いので伊達も少々閉口の様子先生戲談しちやアいけません何うか断はつて下さい、イヤさうでないかういふ時に腕を揮はねば揮ふ時がない、大椽の向を張つてサア書いたり／＼と煽動する、先生は人が悪いや、夫れでは何か急に手習ひをしてと無駄描をした末筆を取つて試みにノタクツたのが不思議によく出来たので伊達も乘氣に遣つて併句なごめき出して盛んに揮毫を遣らした。

鶴島の鮎の光りや豊の秋

などは大に土地の人の稱賛を博した。

連日の大入

さていよ／＼八月十九日盆節季の濟んだアトを得

たりや應と見すまして初日の蓋を明けた處、一等入場料五拾錢といふ此の土地の淨瑠璃では未曾有の高價なるにも似ず、來るは實に素晴らしい好人氣、予は自ら一座の監督者を以て任じ初日早々棧敷の一隅に陣取つて場内ズツと見渡すと大人の上に客種がよい、實に案外な仕合せである、打出すや伊達は樂屋から飛んで來て共に盛況を賀し相携へて木戸を出たが、これが例になつて一晩でも予が來てをらねば伊達も心細いといふので予も乗地になつて毎晩姪や子供を伴れて入場する、打出しには相變らず伊達と打伴れて木戸を出るを例としたが何がさて好きな道でこそあれ、予の得意や推して知るべし伊達も非常に喜んだ、毎日朝の内は伊達も暇なので予が寓所なる惠美須町の赤松家へ尋ね來て澁茶を啜つてはよもやまの話しに時を移すを例とした、伊達は藝人にも似ず閑雅を愛する男である。趣味に富んだ男である、咽喉をいた

假名手本忠臣藏に就て

紅の家 おいろ
赤穂の事蹟を忠臣藏の院本の如く脚色しは元祿十六年竹本座にて「平假名太平記」と云ふ名題にて出したるものを最初とし其數凡そ五十種餘もあるべし、今記憶に存するもの、名稱を擧ぐれば、
平假名太平記 大矢數四十七本
いろは評林 泰平いろは行列
忠臣一力祇園階 いろは藏三組盃
廓景色雪之茶會 太平記忠臣講釋

忠臣増盟約大石 小袖藏いろは配
假名手本忠臣藏 忠臣いろは實記
難波風金鶏 日本花赤穂鹽竈
碁盤太平記 忠臣後日囃
忠臣金短冊

假名手本忠臣藏

附り 高 師直が難題は重きが上の小夜衣折紙にさらめく進物の黄金
附り 鹽治判官が返歌は寝な重ねぞの黒裝束
夜目にかやく苗字の大星

- 第一 鶴ヶ岡の響應文字太夫 第二 諫言の寢刃 島太夫
- 第三 戀路の意趣 信濃太夫 第四 來世の忠義 牧太夫

はる故か、酒色になづます予と共に藝談に耽けるを唯一の樂しみとし會心の談柄に接する時は食事をわすれて精神をぬかすのが例である、まだ書きたい事はあまたあるが餘りくごいゆる一先づこれで切り上げる。(おいろ)

第五 恩愛のニツ玉百合太夫 第六 財布の連判 島太夫
第七 大盡の錯刀 信濃太夫 此太夫 政太夫 百合太夫
第八 旅路の道行 友太夫 第九 山科の雪轉 此太夫
第十 發足の櫛笄 友太夫 第十一 合印の忍兜 信濃太夫
由良之助、與一兵衛、女房おかや(文三郎)若狭之助、寺岡平右衛門、早野勘平(才治)おひる(伊平治)師直、十太郎(清次郎)なせ(小八)定九郎(彦三郎)源吉、文十郎、郷右衛門(源十郎)かほよ、お石(源助)方彌(文吾)判官、天川屋、與一兵衛(助三郎)本藏、九太夫(門三郎)小浪(勘六)伴内(甚九郎)藥師寺(千藏)了竹(太四郎)喜多八(市十郎)

狂言綺語とは言へ此の忠臣藏はど缺點多くして却て世に稱賛せられしは妙なり而して其長所も亦多し試みに之を説かんに(一)舞臺面の大なること(二)中心詩想が日本人の懐ける最大のものなること(三)結構、美術的なること、以上は世の稱賛を博したる所以なるべし。此等全體の結構が先づ妙に觀者聽者の詩想を喚起し、觀者は既に一種言ふべからざるの感興に打たれ漸く進んで勘平住家の場を觀、茶屋場を觀る

其間不可言の妙味を感ずる豈夫れ偶然ならんや。大石良雄の名は戯曲によりて同じからず最も古きものは大岸宮内とし、次に大岸由良之助とし後又大星由良之助となれり大石を大岸とせしはイとキとの通音にて宮内は内藏の一字を生かせるものなるが由良之助、内藏之助と音相通せるに如かず而して大石を大星とせしは音韻によらずして衣笠家長卿の歌

大空に川邊の石はのぼりつ、

星となるとも君は忘れじ

の詠より取り而も女房の名をお石として其本名を利かせたるも面白からずや。(完)

双蝶々の由来

小野 稻洲

前號に「壽門松」の山崎與次兵衛と吾妻太夫との

れを切害して脱走し、親里八幡に身を潜めたれども天網遁れがたく、忽ち召捕られて獄舎に繋かれ處刑を受けしは享保年中の事なり、又長五郎が同じ角瓶者放駒長吉と喧嘩せしも同年代の事なりといふ、左れば淨瑠璃「萬石通」に仕組しは長五郎召捕より僅か一二年後の事なり「双蝶々」に至りては種々の異事を附會したれども其實傳は前に記せし如くなりど知るべし(事實譚)また「南水漫遊」には正徳享保の頃浪花の市中にてもてはやせし小野屋の膏藥と云ふ賣藥家あり道頓堀中橋北詰三軒目にて名は作兵衛といふ、享保十年己十月二日初日豊竹座の操り「昔米萬石通」西澤一鳳作上の巻に

小野屋膏藥とよばれて比も六十餘り、ねばりづよなる堅親仁、箱ふりかたげ立よれば(略)小野屋膏藥、めんやうなかうやく、此膏藥の奇妙には何でもかでも、一つけで、すつべりなをる、とおもはんせ、取わけねぶとや、はれ物や、打疵や

實傳の大略を記せしが夫に因みて「双蝶々」の濡髪長五郎と放駒の長吉が事實の大概を記さんに、濡髪長五郎は父を岩村長右衛門と云ひ、上野國沼田の城主土岐丹後守の家上なりしが、故ありて浪人となり、上國に赴き山城國八幡に退居し名を都倉與惣兵衛と更め兒童を集めて手跡の指南をして暮し居たり、然るに其子長五郎は父の教訓に従はず常に魚鯉を好み遂に父の許を立去り、同地ノ關取荒石斧右衛門の養子となり、名を荒石長五郎と更め血氣にまかせ喧嘩口論を事とし近村を横行せり長五郎日常水に浸せし紙を額に張りて喧嘩場に臨めり、是は濡紙には双物の透らぬといふ俗傳あるを以て期して喧嘩の備へとせしなり、夫より人々長五郎を呼びて濡紙々々と云ひしかば遂にこれを襲ふて名を濡髪長五郎とあらためたり、其後長五郎大阪にいたり諸所を横行するうち、難波裏にて服部惣右衛門といへる武家と爭論を起し、遂にこ

きり疵、ようてうや、けんべき、ひやや、あかぎれ、松の木のはだへの様に、いくつもきれても、小野屋膏藥を、こよりのやうにはそめて、ちよぎやちよんとこそぐれば、茶屋女郎や、十六七の娘のはだへのやうに、すべりつく、めんやうなかうやく、
薬の効能をいひて賣歩行さまを戯文に仕組また其頃放駒長吉の實父とて今世に甞ぶ、「双蝶々曲輪日記」の原本とす、中の巻に
大寶寺町に住居して、營む業も搗米屋、丸屋仁左衛門と人にも知られ、六十三歳米、妻は子種の不作ゆゑ、二人のこゝめ養ひて、末の飯米こしらへも、兄の長吉外を家、妹のお長十三の、年より知恵のひね米や、下部一人りを相手にて世上の花見月雪も、耳の隣の糠はたらき、ふむ米よりも世渡りに、かしらの髪をえらげゐる。
「双蝶々」は此戯文にもとづき、長吉の妹お長を姉

のお關とし、濡髪長五郎との争論、山崎與次兵衛を與五郎と轉じて藤屋吾妻の車跡など一部の戯文にとり組、大當りせしは寛延二年七月竹本座、作者は並木千柳、竹田出雲にて西澤一鳳が「萬石通」より二十五年後なり「双蝶々」を歌舞伎にて勤めしは五年過ぎて寶曆三百年五月五日なり角芝三樹大五郎座にて八幡の場まで勤めしが始にて夫より三都において操りよりは歌舞伎座に花形の役者兩人ある時は二枚ものどて必ず此狂言を出して大當りをなせりと記せり。

鎗權三の實説について

小野 棣 華

前號に附註して置いた鎗權三について、再び一言したいのは亂歴三本鎗である。これは三つの間男事件を集めたもので、第一は雲州松江の太守松平出羽守十九萬六千石の家臣に茶道役勤むる玉井宗義、同役村上宗知の媒介で、小森幸右衛門の娘おかんと云ふ美人を娶つて、およそ、おくれ、鐵太郎の三兒を擧げ

間夫池田軍次郎 二十四歳みづのぬ犬のこし
大袈裟右のかいなを切落され、左のひぢ尻をげて骨出る、疵三ヶ所、肩間きづ二所、こゝめさしたり。
帷子ちとみ堅縮、帯紫、縮緬、金モールの紙入、脇差越前國下、防國綱長サ一尺七寸五分金、こしらへ。
女房おかん 三十六歳きのぬ犬のこし
背に大疵二ヶ所、其外小疵、こゝめあり。
帷子下に白かたびら、上げ光琳の梅立木、墨繪機襟入、帯はないう給子、白縮緬の抱帯、鼈甲の丸櫛、紫ちりめんの帽子。
玉井宗義 四十八歳きのぬ犬のこし (終)

反古しらべ

狂歌

貞柳翁の近松巢林子一居忌に察するに今は安樂國性爺扱も其後便宜なれば「さよまれしを賞吟して
とぶらひの歌はたひ屋の貞しりう
さぞやまんぞくちかまつるらん
故 栗柯亭木端

しに、同家中に池田軍次郎と云ふ好男子があつて、曾ておかんを情交ありしもの、或年宗義に戸詰となり出府するに際し、留守を諸人に托して發足したる、所が軍次郎は鐵太郎の劍術指南を依託されたので、度々留守宅を見舞ふ中に、燒木杭の譬へて終に不義の仲さなつた。下男の武介も「うすく」知つておかに諫言をする、折振宗義、歸國の知らせが來たので、義夫夫婦は手を取合ふて逐電した。武介は遺書して自殺をした。幸右衛門、及び悴の彌七郎宗知等は駆付け、家中の評判取々となつた所へ、宗義が歸宅して、軍次郎は娘おそよの智にさ内約までした程だから不義はせいまいと云ふたが、或朝門の戸へ落首を貼付たものがある、かほよ世の胡慮となつてなる上は武士の一分立ぬとて、彌七郎共々前後して女仇討に出立した七月十三日大阪北濱に着し藏屋敷いんたの介に届濟の上、天満老松町に借宅して兩人の行方を探してゐた。これより先、軍次郎、おかんは上町邊の知音を使りて隠れゐたるを、彌七郎、不圖其の知音を思當り、終に軍次郎に逢ひ母の命にて姉共々命を全うさせんとて、京へ還すに伴はり十七日の暮方おびき出して、高麗橋へさしかりしを宗義、出て軍次郎を討取、逃ぐるおかんを仕留めた。これを高麗橋の仇討とて、西澤作の高麗茶碗と題するものである。鎗權三の實説はこれ明白である譯だ、尙序にて、

竹本がいきする者來りて豊竹方の高麗軍記さいふ淨瑠璃のはづるに竹本は古き千疊敷の淨瑠璃を出し殊に此度はうしろを打わかれしかげ繁昌いかうあらんと云ふに
高麗軍にひけをどらじと此度は

せんぢやうにうしろ見せずや有けん
竹本の五雁金云ふ淨瑠璃文月二日よりして評判よき噂のあれは
はつ秋の空に向ひしかりがねとて
みんな見にくそおもむきにけれ

詞の花

漢詩

院本伽羅先代萩 橋本海關
一朝妖氣掩仙城。侮得邦君禮共輕。藥在胸中頻弄舌。雀飛園外自規聲。茶爐火熾奸臣意。飯釜烟深烈婦情。訴定能全封土地。子孫承世亂初平。
近松巢林子 小山素川

のお關とし、濡髪長五郎との爭論、山崎與次兵衛を與五郎と轉じて藤屋吾妻の車跡など一部の戯文にとり組、大當りせしは寛延二年七月竹本座、作者は並木千柳、竹田出雲にて西澤一鳳が「萬石通」より二十五年後なり「双蝶々」を歌舞伎にて勤めしは五年過ぎて寶曆三酉年五月五日なり角芝三樹大五郎座にて八幡の場まで勤めしが始にて夫より三都において操りよりは歌舞伎座に花形の役者兩人ある時は二枚ものとして必ず此狂言を出して大當りをなせりと記せり。

鎗權三の實説について

小野 棧 華

前號に附註して置いた鎗權三について再び一言したいのは亂歴三本鎗である。これは三つの間男事件を集めたもので、第一は雲州松江の大守松平出羽守十八萬六千石の家臣に茶道役勤むる玉井宗義が同役村上宗知の媒介で、小森幸右衛門の娘おかんと云ふ美人を娶つて、およそ、おくめ、鐵太郎の三兒を擧げ

間夫池田軍次則 二十四歳みづのぬ犬のこし
 大袈裟右のかいなを切落され、左のひち尻を骨出る、疵三ヶ所、肩崎きづ二所、こゝめさしたり。
 帷子ちよみ堅締、帶紫、縮緬、金モウルの織入、脇差越前國下、防國綱長サ一尺七寸五分金こしらへ。
 女房おかん 三十六歳きのぬ犬のこし
 背にお疵二ヶ所、其外小疵、こゝめあり。
 帷子下に白かたびら、上げ光琳の梅立木、墨繪模様入、帯はないろ縮緬の抱帯、籠甲の丸櫛、紫ちりめんの帽子。
 玉井宗義 四十八歳きのぬ犬のこし (終)

反古しらべ

狂歌

とぶらひの歌はたひ屋の貞しりう
 さぞやまんぞくちかまつるらん
 栗柯亭木端

しに、同家中に池田軍次郎さ云ふ好男子があつて、曾ておかんを情交ありしもの、或年宗義は戸詰となり出府するに際し、留守を諸人に托して發足したる所、おかんは鐵太郎の劍術指南を依託されたので、度々留守宅を見舞ふ中に、焼木杭の譬へて終に不義の仲となつた。下男の武介もうすく知つておかに諫言をする、折柄宗義、歸國の知らせ来たので、義夫は婦は手を取合ふて逐電した。武介は遺書して自殺をした。幸右衛門、及び梓の彌七郎宗知等は駈付ける、家中の評判取々となつた所へ、宗義が歸宅して、軍次郎は娘おそよの智にこ内約までした程だから不義はせまいと云ふたが、或朝門の戸へ落首を貼付たものがある、かほよ世の胡慮となつてなる上は武士の一分立ぬとて、彌七郎共々前後して女仇討に出立した。七月十三日大阪北濱に着し、藏屋敷生田城之介に届濟の上、天満老松町に借宅して兩人の行方を探してゐた。これより先、軍次郎、おかんは上町邊の知音を便りて隠れぬたるを、彌七郎、不備其の知音を思當り、終に軍次郎に逢ひ母の命にて姉共々命を全うせんとて、京へ遁すこ伴はり十七日の暮方おき出出して、高麗橋へさしかりしを宗義、出て軍次郎を討取、逃ぐるおかんを仕留めた。これぞ高麗橋の仇討とて、西澤作の高麗茶碗と題するものである。鎗權三の實説はこれに明白である譯だ、尙序に、

竹本ひいきする者來りて豊竹方の高麗軍記といふ淨瑠璃のはやるに竹本は古き千疊敷の淨瑠璃を出し殊に此度はうしろを打ぬかされしかば繁昌いかとあらんと云ふに
 せんぢやうにうしろ見せずや有けん
 竹本の五雁 金さ云ふ淨瑠璃文月二日よりして評判よき
 噂のあれは
 はつ秋の空に向ひしかりがねとて
 みんな見にこそおもむきにけれ

詞の花

漢詩

院本伽羅先代萩 橋本海關
 一朝妖氣掩仙城。悔得邦君禮其輕。藥在胸中頻弄舌。雀飛園外自規聲。茶爐火熾奸臣意。飯釜烟深烈婦情。訴定能全封土地。子孫承世亂初平。
 近松巢林子 小山 素川

日和曰漢事周通。留世遺篇筆々工。如此多才應無比。藝林尙遺獨斯翁。

同 岩田 靜堂

縱橫椽筆自天真。人事機微寫出新。悲劇艷文戒當世。傳來淨曲百餘春。

同 梶原 無禪

肥山城水養天真。幼婦紅絹一管新。世態人情寫出所。請看百代不究春。

和歌

忠臣藏

今は早十年あまりの昔なりけり。おのれ讃岐の國にありし時、おもふごちを集へて、歌のまどゐしけるが、ある夜、忠臣藏をよまんとて、とり／＼にうめき出でたるを、そが中より意のとほりたらんとおぼしきかぎりぬき出で、ひとひらのすりまきにしつるが、このほどゆくりな

五段

まがごとのふりかゝりしは雨に着るみのしろ金や
仇となりけむ(周)

六段

ながらへば實となるべきを雨風にしづごゝろなく
花さちりけむ(顯)

七段

知られじのこゝろがまへと朝な夕なあだなる花に
うかれたりけむ(義)

八段

うれしさをつゝひにあまる旅衣はなのたもとぞゆ
かしかりける(周)

九段

山科のさそによごもるゆふ月はうらみのくものは
れ間まつらむ(義)

十段

つまも子も今はなにせむちかひてしをのこ心はわ

く篋の底より出でたりければ、うつしとりて貴誌に投ず。若し埋草にもしたまはんには、こよなき幸になん。

明治四十三年十月八日

水葱園主人よし臣誌

大序

はかなくも花と散りにし人の名は着てしかぶどの香に匂ひけり(周)

二段

加古川の岸に生ひたる松が枝をきりしやふかきこゝろなりけむ(義)

三段

うたてくも慾といかりのあらそひに白き書院もあけに染みけり(元)

四段

忍びなばしのばるべきにおそや君我身ひとつのうきめならじを(鉦)

れたがへめや(長)

十一段

降るゆきのつもるうらみをはらしけり仇浪よする
すだの川べに(長)

狂歌

みやび會投

題 假名手本忠臣藏

群咲 四季文

神垣に千歳もこもる鶴ヶ岡
めで度き御代を見する幕明き

僧正坊 鼻丸

加古川の深き忠義は十返りも
君をおもひて伐し松が枝

米花園 露睦

妻重ねせざる返歌の言の葉に
喧嘩の花を咲かす殿中

化粧の屋

勘平は知らぬ喧嘩の門違ひ
裏門へ来て打叩くなり

松濤園 旭浦

王質のこたえ目なれば悪者の
名に朽果つる斧定九郎

忠孝の音ひいきたる二つ玉
敵討にははやの勘平
松翁

蝟の足手に頂きて九太夫に
骨なきものと見する大星
都草庵 秋丸

義理と戀一荷となして兩掛を
供にもたせて嫁入の旅
五明庵 扇翁

豊年と當る外題の假名手本
貢ぎの雪も降れる九段目
蝶鳥舎

頼まれし秘密はこもに包みてぞ
かたき義平が駄荷の運送
扇遊

長持のふたりと世には通れな
大事を明けて言はぬ男氣
都豊園 雪丸

積りたる怨みも晴る、雪の夜に
光りを見する大星のかげ
都窓庵 文丸

大星が力をこめた山家流
二つ巴の太鼓うち入り
都園 芥子丸

忠と義の兩國橋を本望の
わたりかへりし大勢揃ひ
敷島道成

時 報

十一月の文樂座

小野 稻洲

前「一谷嫩軍記」中「金刀比羅利生記」の志波寺、切
「神靈矢口渡」の頓兵衛住家の段で随分コツテリと
した藝題である、マサカ一の谷の菊の前で時候を
利かして居るのでもあるまい、岡部六彌太館の段
中の富太夫は腹が薄いが淨瑠璃は確に上手である
菅の井は上出来、菊の前のサワリは非常に好い、
夫に三味線を三二が弾て居るので一層聞き榮わが
する▲切の七五三太夫は斯う云ふものは口にな
いで大分に損があるそうして落付に乏しく急ぎ込
む氣味があるので何となく舞臺が騒がしい、併し
菅の井、梅の戸の詰合はよかつた、醒が井藤太は
手負になつてから手強くて聞應へがした▲脇が濱

の段の静太夫は儲かる役とて齒抜け與の物語りな
ど大受である▲熊谷陣屋の段、中の呂太夫はハキ
くこそぬ語り振り藤の方も相摸も宿場女郎とよ
り思はれぬ▲切の越路太夫は一言隻句も忽せにせ
ず地も詞も注意に注意を加へて語るので費目もあ
り性格、表情、抑揚など些しも申分がない我子を
討つた熊谷は胸に憂を含みながら夫とはなしに相
摸を叱る處無限の味がある、物語りの間一點の扱
け目なく首負檢になつて「御批判如何にと言上す」
「十六年も一ト昔ア、夢であつたなア」など其妙云
ふべからず藤の方は口説の憂も利き「魂魄此土に
あるならば」と悔みの間のうまさ「アイと計りに女
房が」の相摸の憂なんとも云へぬ「持たる首の揺ぐ
のが領く様に思はれて」など非常にうまい例の「國
を隔て、十六年」は悪からう筈がない、彌陀六が
彌平兵衛となつてからの立派さ義經の貫目も確に
源家の大将である「親子四人が助け嬉しさ」など

品もあれば味もある▲中狂言志渡寺の中は叶太夫
器用に語るのと儲かる場であるので客は大受であ
る▲切の攝津大椽は語り込込咽程恐ろしい物はな
い七十五歳の老軀を以てこの難物を樂々と語つて
退ける、とても尋常人の及ぶ處でない是ならまだ
く、ごんな物でも決して案じる事はない、大隅
太夫のもよかつたがまた趣きの違ふ處がある、元
よりお辻に重きを置いて語つて居るが去りどて方
丈なり内記なり菅の谷なり何れに思はない、取分
け源太左衛門の意地悪き鹽梅、一寸の隙もない、
お辻の異見はシミムと應へ砂字の間妙を極め祈
りの處は更に又發展して其息の續く處驚き入るの
外はない、次第々々に聲が細りゆき息も絶へぐ
になる鹽梅全く入神の技である、廣助の糸も藝の
極に達したものだ、祈りの間或は太く或は細く終
に微に其音色を保つ處言ひ知れぬ妙味がある▲切
の頓兵衛住家の段中の時太夫は御苦勞で御座る▲

切の染太夫は總體から云ふと悪い方でもないが何分口捌きの好い方でないから何となく重苦しい聞ゆる頓兵衛はあんなものであらうが六藏は時代めいて居る、其他お舟、義峯、臺は一ト通りであつた。

人形では多爲藏の森口源太左衛門が第一等の出来内記を嘲弄する處が如何にも甘い、榮三の相摸はあんなもの、お辻は懸命丈に見應へがある、三左衛門はお舟にウンと力を入れてゐるが随分うまひ玉次郎の彌陀六はたしかなもの、六藏も軽い、文三の熊谷は近來大分まじめに使ふので腕を上げた頓兵衛も一寸甘い。

十一月の堀江座

小野 稻洲

同座十一月興行は前「加賀見山 舊錦繪」長局迄中「成相寺觀音靈驗記」切「お染久松新版歌祭文」油

は至極陰氣な語り物と云ひ尾上の述懐は誰が語つてもダレる處をグツと引締めてダレさゝ殊に憂が十分應へるので聞人は何れも鼻を詰らせハンカチを目に當て居るお初の初々しい中に活氣のある處確に烈婦と見わた、其異見の間の旨さ「私としたことが鹽谷様には親御はありはせぬもの」なご好い出来なり引返しての愁嘆「遅かつた〜〜」よりキツとなるあたり寸分のすきもない、尾上が愁嘆には滿場を泣し「小い兒かなんぞの様に」なご無類の出来、吉三郎の糸は冴わたもの奥庭の段の米太夫もメキ〜と上達した▲中狂言の成相寺靈驗記は香川蓬州君の書下し鼻と疊は新しいのがよいとやら萬事新規を喜ぶ世の中ではあるが淨瑠璃と茶器とは古い物に味がある、併しこれは斯道に熱心の春子太夫が筋も心得、人形の性格も調べ研究に研究を加へて語るのであるから新物とは思へぬほど人形が活動して居る、夫に新左衛門の糸

屋の段にて藝題の選擇は餘り感心せぬ、物淋しい晩秋の季節を當込んで斯も陰氣な物計り出したのもあるまいがせめて一ト場丈金襖物が見せて欲しかつた▲偕又助住家の中三笠太夫は中々の上出来、女房の身賣に見物をホロリとさせる▲切の大島太夫は長らく地方巡業中の處久々の出勤にて一層人氣を加へた、此又助住家の段は「加賀見山廓寫本」から此一ト場を引抜いて繼足したので前後の筋に協はぬ處があるのと一家全滅と云ふ随分悲惨な場であるからわざと愛へ繼足すほどの必要もない、是は太夫の知つたことではないが筆の序に一寸書て置く、偕安田庄司なり谷澤求馬なり隨分の出来又助は中々うまい「馬の諸足二さし三さし」竹 鋸の罪人ど」など餘程旨い▲草履打の段は錦太夫の岩藤、三笠太夫(此日は菅太夫の替り)の尾上何れもよい出来であつた▲廊下の段は錦太夫、愛等本役なるべし▲尾上部家の段の伊達太夫

の鮮かさ大江山の唱歌に琴を入れての手事、云ひ知れぬ味ひがある、切の油屋は歸りを急いだので聞き漏らしたが思へば惜しい事をした。

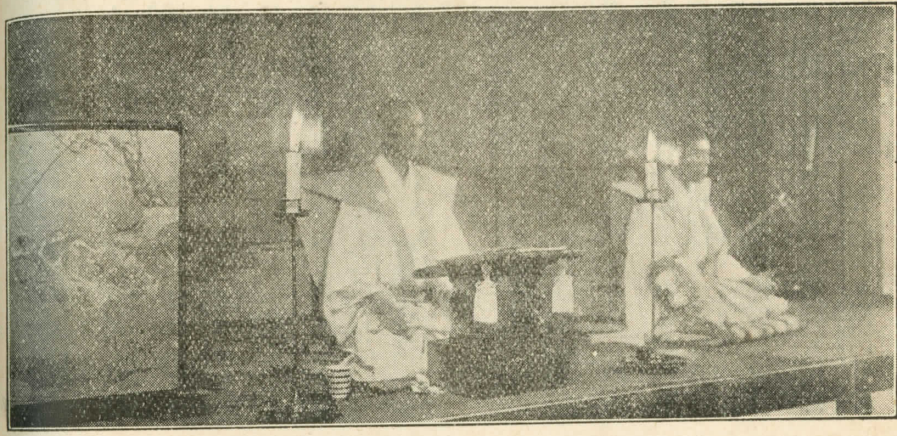
人形で好かつたのは兵吉の岩藤、手に入つた物とて無駄がない、お源も根強くてよい、玉造のお初は上々の出来、庄屋次良作は一寸出るのであるが何處となく様子が違ふ、文五郎の尾上は抱へを引締めて立上がる處の容がよい、お袖も情愛が溢れて見わた、駒五郎の又助も悪くはない。

松葉家連の盆會

既記九月二十八日堺市卯の日

座に於て松葉家連の盆會があつた、濱村貴若を主腦として組織したる幼聲會の花形株が多く出演するので開會の正十二時には早や満員、聴衆約二千名、南北兩機敷は新町堀江堺の紅裙と大阪、堺の犬天狗連が占領し、中にも京都祇園の愛吉が美人半ダース連れての義理見物は衆目を惹いた記者は阪界の心寺は淨瑠璃も小さくて、四方天の諫言かぶい、光秀も勇氣に

しい。◎柳の聚楽町は大阪梅田の花形、いつものながらの好人氣◎龍水、佐倉曙は聲を痛めて御座つた故、苦しい様におはれた、世を忍ぶ宗五郎が我家を音訪ふ呼りけは聲が高過ぎる。◎涙六の本藏下邸は枕頭を鳥渡さ語つて奥の呼出しから語つたは舞臺劇れたもの、若狭の助も突込んで語つたが賞目が無い一徹短慮の風も見ぬ、悔み泣い



い、い、い」の繰上で餅搗を開業したは大愛嬌。◎小巻の忠四は佐野屋橋のドツサリと呼ばれて大受、聲も確か腹も強い薬師寺も石堂も上手に語分け郷有衛門さ力彌の詞も情がある、判官は殊にふかつた。◎菱文の櫻丸腹切は、お産古が古いだけに甘い泣やんない、アイ泣やんない」を繰返して泣落す嫁舅の表情も結構、一可借若者を「の張も住し、段切は圖抜けて佳かつた。◎貴若の柳は急霰の如き大喝采を以て迎へられ「妻は」の大廻りから「信田の古巢へ」のあたり素人にもこんな巧いひがあるか、初対面の人は驚くに相違ない、竹三郎も「うで腕を懸命に弾いてゐた此の日の大入も全く此の人の聞きたい爲である。◎小若の酒屋は貴若のアトゆいごうあらうかご案じるよりは産が安く何しる日本橋の色男様と掛聲がかよつた計りでも儲けもの。◎呉服の合邦は品の宜い語口で呉服丈に幅も丈もある、「聞く子や親は」の邊は抜る程甘かつた。◎松玉の童歌は前の痴話場をスキにして三重から奇抜に演じた、中々大舞臺で大喝采、「坂へ登れば」で例の口三味線もアザヤカへ走り此方へ走り「此方へ」の邊ではヤンヤさいはせた。◎大切の十種香の總掛合は時間切迫、出演牛でチクラなつたは惜しいもの。(吟翠)



益田福昇氏の追善會

中村吟翠

此の世にて語りつくさぬ淨瑠璃の
 辭世
 節は蓮の上にしらべん



會員故益田福昇氏二到淨瑠璃士の追善淨瑠璃會は十月十二日梅田町金龍館に於て開かれた、出演幹部は柳、龍水、登系連にして故人に縁ある近松會員が多數であつて、番

故福昇

妻 たき子
 亡人の手向に語る淨瑠璃は
 香花よりも彌まさるらん
 手拍子の扇のぬしの今はなく
 風の便りもなきを悲しき
 息 伊太郎
 歎けども歸らぬ人ぞ知りながら
 忘れぬたき我思かな

組に先立つて柳クンが梅田の聚樂町を語つた。此語物は本年四月廣濟寺の近松翁追善會に於て演じた故人の十八番物で、舞臺は小サイが頗る情のある語口で小梅の愁歎や由兵衛の

詞で満場を唸らせたもの、然も本會に多大の望を囁して大に前途を祝つてあつた故人を追憶すれば、轉た懐舊の涙を禁じ得なかつた。殊に未亡人たき子も亡夫の素志を繼續すべく、且つ小野利教大人に入門し和歌を學びて大本會の發展を祈りつゝあるは感すべきである。

△初手向は南地の一光といふが登系の糸で又助住家を語つた、全體に大受けであつたから、故人も地下に冥したであらう。
 △梅川新口村古竹糸登系
 淨瑠璃は小サイが品の宜い語口である。「暖められつ暖めつ」の句は綺麗で尙餘情があつた。忠兵衛は大に修養を要す、梅川はお手のもの、「私もたんと恩のあ

るの述懐は大出来。△岸姫松三段目、土光糸登糸||與茂作は若い竹生島の物語はシンミリと聞かせ、例の「やちとせや柳に長き命寺」の歌から徐々佳境に入り。充分愁を利せて「九々生て十七年」から搔口説く藤巻の述懐も大喝采。△菅原寺子屋金時糸登糸||姓が黒田で金時と云ふ顔觸だけに、淨瑠璃の解釋も黒いが陰る方も金印である源藏夫婦密談の間も佳し「せまじき物は宮仕へ」は今一息。立蕃と松王丸の意氣込は咽喉一ぱい、例の子供検めは糸と相俟て上乘大喝采、時間切迫「子ばかりよつて立歸へる」でヲクラと

なつたは惜しい。△梅野聚樂町、鯉昇糸名瑠吉||七十六歳のお爺サンで近松宗の大信者、文樂の攝津大椽が聞いたら税金の要求をするだらうが、女義界の尤物は未だ咲残る名瑠吉の糸で「跡に由兵衛はかけがね掛け」から段切迄語つたなごはお爺サンドエライ精力。△一の谷熊谷陣屋、三八五||糸名瑠吉||例の物語は無難、女房の相摸は大出来、富士の方は品に乏し、例の口説はダレて語る半に鈴が鳴つた。△伊賀越「岡崎雪降の段」勢玉||糸名瑠吉||お若い處もあるが、名瑠吉連の花形株だ「引立入にける既に其夜もしん

「裏から忍んで納戸口」は器用なものだ。「したふ足あと氣轉の唐木」で、政右衛門と組子の暗闘の間も雪の情景を表はしての語榮幸兵衛は不自然、政右衛門が庄太郎で主従名乗をする間は大切に養を要す、要するに地合は濼くつて幅も鳥渡あるが、臺詞は不自然な處が多いやうだ、然し此難物を動す苦勞は容易な業でない多謝々々。

◎中入

△加賀見山長局「福雀」糸登糸||初中の飛附きに出演して大儲け、地合で聞かせる難物「跡見送つて」尾上の愁歎から優かに

語出して聴衆に感動を興へたは感謝の至り。尾上の詞は品が宜い、性來の美音に充分愁を利せて例の述懐を綺麗に畳み動し、「親子の縁の薄墨に、書置筆の逆さまごと」の邊は情緒溢るゝばかりで、登糸の糸も耳に附かず圓滿優美の音色と相俟ての長局で大喝采。△太功記十段目。柳糸富次||十八番の尾ヶ崎を演じて大歡迎「哀を爰に吹送る」の糸織から持前の美聲を發して操の口説まで大車輪、既に定評ある語物だから評言は管である、富次の糸は腕一ぱい、遠路苦勞々々々。△お染新版歌祭文||米昇糸登糸||例の歌祭文を蔭にし

て夢合せをシンミリと語り終るや直に、袴を引外して袷袷衣に變装しての坊主藝當、而もりん打鳴して白骨の御文章を讀上たは本願寺も蹴足だ。夫人間ノ浮生ナル相ヲツラゝ観ズルニ」ナンカンと眞面目千萬「のう久松、あれは父サンのお讀なされる白骨の御文章」。「モトノシツクスエノ露ヨリモシケシトイヘリ」。「あれ聞きや、そなたもわしも果敢ない身の上」。「阿彌陀佛ヲフカクタノミマイラセテ念佛マウスベキモノナリ穴賢々々」。「チン、チーン、南無阿彌陀佛」。「へエ聴客サマも能く御參詣でした...と言葉

て床を退いたなどは大に揮つて居る、聴客は大笑絶倒。△合邦下の巻||さかへ糸登糸||合邦老夫婦の詞も能く碎けた、總體に引締つて語られ例のサワリも的込をせず、沈直に語り盡したは年功乎「只打守り」でヲクラとなつて惜しいの掛聲湧出。△伊賀越沼津(奥)雷鬼糸登糸||小弓富次||平作が切腹してから詞は渾身の力を入れて語り、重兵衛の表情も佳し、お米の思入も充分にて親子三人哀別離苦の悲みも泌みくゝと應へた。雷鬼センセイ大當り。

◎中入

△二中の飛附きは不二の鳴門八

田中燕子翁追善會

▲海天狗の發展▲聽客も天狗捕ひ
 辨法衣以上の大天狗然も紳士と名のつく
 れきくはか 莫大の會費を物こそせず暇
 屋々許りが莫大の會費を物こそせず暇
 潰しの道樂に催すのであるから二十四日
 京都河原町の田中氏別邸に於ける燕子翁
 つるの追善淨瑠璃會は實にドエライ盛會で
 つつはら せつづら せつづら せつづら
 あつた露拂ひは攝津大椽の筈であつた
 きしやこやう ためなんちやく
 が汽車故障の爲延着したので幹事長の
 さるゆきさだま、よのすけ
 土居雪子太夫(糸豊之助)が代つて合球を
 ウナつたが流石第一流の大紳士腕前はさ
 もかく姿勢儼然と紳士淨瑠璃の模範を示
 したのは嬉しかつた▲次は殿村千鳥太夫
 いごだん しろうりもんつきい
 (糸團七)白襟紋附優にやさしく芝居の
 殿樣然たる態度は慥に美形連の喝仰を
 引いた▲次は攝津大椽、廣助、越路太夫
 きちちち かけあい かるかや だんか
 吉兵衛の掛合で、荊萱山の段を語つたが餅
 屋は餅屋 幾ら手加減をして語つても水

あつた。八重も可憐、段切のお
 念佛は追善供養としてお誂へ、
 冥するのは櫻丸ばかりではなかつた。
 ドツサリは硝子クンの道明寺で是も、追善といふ意味を
 含むでの語物、昔相丞は優美
 吳道子墨繪の條から「數珠のか
 ずく線返す」「道明寺、寺の
 名も道明寺とて」云々の段切迄
 品佳く語られたは近來の大出来
 登糸の三味線も健腕、多數出演
 者に對して隔意なく穩當均一の
 補助で何れも華やかに弾かれた
 は感謝の至り、目度度く閉會せ
 しは十二時であつた。

ツ目、ふるさどや」の御詠歌か
 ら語つたは殊勝である、お弓も
 おつるも能く情が籠つて居つた
 次は天満の素人伊達と云はる、
 柳枝の新吉原揚屋の一段。性來
 の美音で宮城野はお手のもの、
 妹信夫も可憐い奥州言葉は大に
 研究を要す、「何の奉公ごころ
 か」「旦那寺へ駈込んで」は大出
 來、時間切迫 末の松山で切つ
 たは遺憾千萬であつた。二十四
 孝三の切は素人染太夫と噺され
 つゝある辰玉クンの十八番惡か
 らう筈がない。龍水クンの菅原
 傳授櫻丸切腹の一段は大島太夫
 も蹴足だとの好評、白太夫の詞
 も濛の中に溢るゝばかりの情が

子屋の首實檢を語つたが稽古もよし一體
 アカわけのした藝風ゆる水際が立つて貫
 目があつた▲野口律司氏(糸廣助)の須磨
 の浦は聲もクセがあるので敦盛は品がな
 かつたが一體はよかつた以上大阪方の紳
 士がセングリ語つた跡で大隅太夫も病後
 の咽喉しらべに一段手向けた出し物も
 酒屋丈に満座の客を酔はしたらしい夜に
 入ては京都方の受持で棧屋の主人を始
 め一騎當千の大天狗我れもくぞ鼻くら
 べ、入坂の塔も物かほであつたといふが
 記者は中途で引退つたので残念ながら聞
 き漏らした▲此の日に聽客も亦天狗界の
 強物揃ひ緒方夢蝶、緒方花咲、澁谷香波
 なご何れも此の道の本阿彌を以て自ら許
 す先生方、それ側では難萬のお徳、富
 田屋のおよね、大和屋のお千代、京都で
 は片山春、吉富、池鶴、松本さだ其他
 有名の女將、老妓連雲の如く集つてそれ
 は一賑かな事であつた一段了る毎にエ

鶴龜會のぞ記

ラムの連は銘々得意の太夫さんの樂屋へ
 駆け込んでお世辭、辨茶雜の百萬遍、ウツ
 さ知つても悪くはないかニコノ顔の大
 得意、當人はまだ傍の者は冷汗の絶間
 がなかつた様だ(馬脚)

つるの追善淨瑠璃會は實にドエライ盛會で
 つつはら せつづら せつづら せつづら
 あつた露拂ひは攝津大椽の筈であつた
 きしやこやう ためなんちやく
 が汽車故障の爲延着したので幹事長の
 さるゆきさだま、よのすけ
 土居雪子太夫(糸豊之助)が代つて合球を
 ウナつたが流石第一流の大紳士腕前はさ
 もかく姿勢儼然と紳士淨瑠璃の模範を示
 したのは嬉しかつた▲次は殿村千鳥太夫
 いごだん しろうりもんつきい
 (糸團七)白襟紋附優にやさしく芝居の
 殿樣然たる態度は慥に美形連の喝仰を
 引いた▲次は攝津大椽、廣助、越路太夫
 きちちち かけあい かるかや だんか
 吉兵衛の掛合で、荊萱山の段を語つたが餅
 屋は餅屋 幾ら手加減をして語つても水

去月二十四、五、六の三日間、京都五條橋
 ついで、お世辭、辨茶雜の百萬遍、ウツ
 詰五條俱樂部に於て同會が開演せられた
 記者はその初日に田中郎からの歸途立寄
 つた。まづ親切なる幹事諸氏の詞に満足
 して、二階の席に上る。早多數の聽衆
 が詰懸けて居たが、正午十二時開會とい
 ふが、やつと二時過ぎに始まつた都人の優
 長にもそゆる感心した、も一つ感心した
 は、床さ云はす席さといはず、緋毛氈も敷詰
 てあつたここで、都は歌所さの聯想さへ
 起きた。番附面を破つて露拂には巴笑ク
 ンの名木先代秋殿が、咲治翁の糸で語
 られた、瀟灑なる美少年との對照最も妙

際も立つて面白いで雲の如くに集まつ
 た盛裝の婦人連アツさ感に打れ石童丸
 父子の別れには袖を絞らぬものはなかつ
 た▲去れども一座は、これしきに鼻柱を折
 らるゝ様な押の弱い先生方でない、差替つ
 て高座(現はれたは渡邊運動氏、得意の
 日吉丸を懸命に語られお政のサワリから
 後の口説も淨瑠璃も身振も如何にも
 面白かつた▲次は何さかいふ黒人上りの
 婦人丈に少しもロヨロつかずヤンヤとい
 はせた▲次は桐原同木氏(糸廣七)の長局
 尾上にお初を見送つて後の冷泉節の間も
 相應に面白く相變らず婦人受けよかつた
 ▲次は田中春、錦氏(糸廣七)の十種香、古
 い稽古で聲がよいので相應に聽かれるが
 この人も身振が烈しいので場内の隅々に
 クス／＼笑ひが聞けた▲湖龜三司氏の寺
 子屋の源藏戻りは樂屋にゐたので聽きな
 かつたが例の如く巧かつたといふ▲島青
 洲氏(糸豊之助)に湖龜氏の跡を受けて寺

であるに、中々器用に語られた、前途頗る有望、大に奮勵したまへ。次は捕音嚙、碓拍子の掛合で、大笑クンの徳太夫、喜美イクンの女房に、白人クンの百姓雑兵、さいふ役、糸は廣左衛門クンで、殊に大笑喜美イ雨翁は容貌年配ソツクリと翁媪に必適して居るのは妙の又妙、共に上手に語られた、時々女房の絶句もあつたが、白人君の軽い雑兵調で埋合せが附いた譯だ、このごんぶりこの掛合せ三日間連演の苦ださうで、あまりの面白さに長居して、までも少し聞きたいとも思ふたが、腹はボツ／＼北山でない東山の頂が暮かゝつたのに驚いて退座をした。(一記者)

堀江座の新作浄瑠璃

丹後節の當込、大江山

本誌附録に連載せり

大隅太夫の咽喉調へ

病後の大隅太夫が咽喉調へに何を語つて見たいといふので緒方博士が監視者となつて十月二十八日午後三時から築地多景色樓で一席の雅遊を催す事となつた、知らせを得て取敢へず馳つけた處、まだ大隅は來てなからぬけれども、二階座敷の正面には床を設け垂簾をかけ金屏を廻らし早や一人語つてゐる▲偕は大隅が語るとは鶴はり羊頭をかけて狗の遠吠を聞きなされるの、こゝ心に嘔やきながら聴客の席へ直つて見れば十數名、肅然として神妙に聞いてゐられるは同じ仲間の鶯天狗、中には生面の新天狗もあるのでヨイツ却つて面白からうとお膝に手をついて辛抱しつゝ拜聴する▲今語つてゐるの緒方婦人科病院の中井湖畔氏、戀十の子別れを

の唱歌、本物の堂宇

香川蓬洲氏新作の「成相寺觀音靈驗記」は今回堀江座の舞臺に登つて頗る歡迎された笠松茶屋は團平の節附たさうな筋に關係のないツメの人情が多い其の上忠作の縁起物語も長い、この人形の手づいてならぬので餘り振はない、角太夫が熱心に勤めるの、書割もよい、丹後節の當込などあつて前受けよい方である、丹後縮緬の工女を當込んで妹背山道行の文句を取つた所作は花やかで面白い▲切りのお源婆住家は娘のお袖も巖の良人作次郎を大事にかけ極貧な母親に幸養を盡す母は蟹の懷中を絞つた揚句金になるよい蟹と取替へんとして巖の蟹をさいなみト切月の文殊へお袖夫婦も通夜に行くを悪漢丑松と謀つて打果さんとする、時にお袖が日頃信する成相觀音の靈驗で雷霆の爲丑松は打たれ作次郎は足が立

初心ながら器用にこなす、露拂ひの足立天涯氏の下屋敷と共に床の皮切りさはお二方とも外科と見ゆる▲お次は大兵、肥満の緒方妻蝶博士ドツサリ坐をかまへて、山科を語る外観から如何にも大立物稽古、よいの、ご人格がよいので一體に上品で落つきがある、殊に月奈瀬の言葉が不思議に巧い、ヤンマリと品がある、昨年の洋行にプタバスタの美人界を風靡した腕前も何處やらにチラつく▲次は堀内花薫氏の合拜、シットリと落つきを見せて仕舞になるほど糊張のするはお手摘流石に咽喉の使ひ方も巧者である▲美音を以て優に仲間の花形として知らるゝは湯川二葉氏である、此の日は板卸しの先代萩、米洗ひの節廻しもシットリと加減よく出来地合も消化よく胃腸に障りもなきやうであつた▲多年の練磨で何處もなく手堅いのは、遊谷香波氏の尼ヶ崎、絲の新左衛門も腕にまかして彈き廻しサア斯うお出

ち悪婆は發心するさいふ筋▲此の場の春子太夫は例の器用な語り口、お袖のサツリは艶麗でもあり繊巧でもある、二月も伏屋も厭ひはせぬ「なごアツこい」はせる「大江山」の唱歌は琴を入れ富吉法師が傳授の手、新左衛門も冴れた音色にける事、ゆゑ満場耳を澄して梁上の塵も動く許り、悪婆の作次郎を呵責の處は胡弓を入り一體の節附は派手に出來てゐる▲送り三重で道具が變る、切月の文殊堂で瓦斯仕掛の月をあしらひ天の橋立の背景も如何にも奇麗だ、段切はモウ一杯大道具をかへて成相のお山を見せる、三棟の堂宇を本物の木材で組立て奥深く飾りつけるので芝居には勿論ないほどである、此の道具丈でも木戸錢の値打はある、芝居の道具も馬鹿に金が掛る様になつたものだと驚かされる、人形も玉遣、兵吉、文五郎、駒十郎の四人が手揃ひ出使の肩衣も床さ揃ひの中々凝つたものであつた。(本文は

でと誘ひ出すやうに然も息を謀つて合して行くので一層光彩を添へた様だトツサリは緒方花溪氏の渾津、此の眞世話をアノ髯でと豫想するのは大早計、何しろ叩き込んだ腕、一座の鳴りを静めたのはそれ丈の手應があるからだ▲日本で一二をあらそはす大隅太夫も此の大天狗連の前へ出ては羽風に懸されて追出しに廻され、大切にして紙治の炬燵を語つたが、よほど元氣がついて來て何うやら來年の一月には芝居へ出られさうであつた(馬脚)

新町の瓢々會

新町善太夫藝妓の瓢々會は十三日午後六時より同廓七寶亭にて開いた、其出し物は菅原四(近丸岸姫(近作)野崎村(浦枝)新吉原米六(三日太平記(近太郎)のし(勇吉)先代御殿米路(一)の谷(米助)太切蝶の道行總出掛合

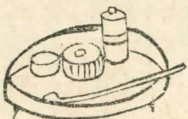
堀江の義太夫温習會

義太夫藝妓に臨すの多きは堀江遊廓なり同席にては本月下旬明樂座にて温習會を催す事こと藝團を「帶屋」「さんぶり」「寺子屋」「雙蝶」や橋本「勸進帳」「七福神廻りの入船」をした總掛合にてさんぶりこ橋本は長十太夫、八助、寺子屋、勸進帳は小團二の擔當とし十七日より稽古に取りかかりたり因に勸進帳は先年風勢町稻荷座にて故關平章つりしものしりくじんきくひやぐらだいこ附の新物、七福神は曲彈樽太鼓、琴胡弓入の諸藝廻した演ずる筈出演者左の如し

末吉、若石、扇吉、しん、六助、駒一、梁之助、三吉、石子、力奴、染吉、絲吉、扇光、扇ぶり、末三郎、駒二郎、三柳、三平、石丸、梁六、吉八、吉三、菊太郎、末龍、傳丸、小壽吉、駒福、菊松、末松、石太郎、廣丸、廣八、龍太郎、さだじ、小つや、駒三郎、駒助

はなくらべ(一)

北新地平田席 君之助
鼻競か、あらず、花競か、女義界の美にして技の秀でたるもの、此の處讀者



の鑑識に委ねむ。君之助本名は芳松くん、當年取つて十さ九、生れば京の寺町である。十一の年豊澤廣造に就いて唸り出したが、十四の春平田席に出現して翌る十五に新町は木原席に政吉の妹と

なつて披露をしたが、又翌る十六の冬から今の店へ再現したのである。爾後廣造、清六、叶などの師匠に就いて、目今ハ寛治郎に稽古をして居る。艶物は得意であるさうで、中将姫はその十八番の事。實の妹は同席の二蝶さいつて諸君御存じの細藝妓だ。

古浄瑠璃展覧會

大阪府立圖書館にて第四回珍書展覧會として十一月午後一時から本月中旬浄瑠璃并に繪入細字浄瑠璃本の展覧會を

開催した、流石は本場であつて珍書多く古浄瑠璃丸本にては獻上本、入行本十行本あり繪入細字浄瑠璃本にては公平本、小形本、牛紙形本(五段本(牛紙形本)六段本(小形本、牛紙形本)など多方面

に渉りて蒐集し永田、木谷、小栗、小山田、中井、平瀬、宮武等諸氏及び京都よりも小山、山口氏等の出品あり尙参考としては永田氏の往古梨園集(三帖)なども陳列してなる、軟派古板本の纏まりたる展覧會の開かるゝは大阪文藝界の誇なること共にこれに資りてますます斯道の研究を重ねたいものである。

はなくらべ(二)

新町木原席 小松
小松福本名を田中よねこ云ふ、芳紀まさに二十、近作裙の實の妹である。新町

に呱呱と生れて、十五の年甫めて鶴澤勝風に就いて語りだした、十七歳から近吉の



妹となつて今の店に出現したのである。得意の物はご問ふてもオホ、いゝと笑つて謂はぬ處、謙遜か、初心か。

會員消息

○本會長土居通夫氏は十月末東上本月中旬歸阪の筈
○發起人入木與三郎氏も本月東上中

○會員益田福昇、廣田山三郎の二氏は死去の報に接す爰に深哀悼の意を表す
○贊助員近藤破笠氏(麗玉軒)は病氣保養のためふかせんなんかひつが爲府下泉南郡貝塚町字北へ移居
○同武富五全氏も西成郡豊崎村南濱へ移

通信欄

○浄るり丸本、浄るりに關する古本、竝に、嘗つて東京に於て發行されし義太夫雜誌及大阪現

行の淨るり雜誌（近刊ならざる
號）讓受たし。之に應せらるゝ
方は外題、號數、代價記入にて
一報を乞ふ。（東京市芝區白金驛町）
（二十七）細川芳之助

寄贈書目

○演藝雜誌娛樂第三、四號○あさみどり
十月號○邦の光同上○淨瑠璃世界第
四十八、四十九號○川竹第一號○大阪日
報逐號○幼聲會紀念號○浪花名物
淨瑠璃雜誌八十九號



近松會雜誌第五號附錄

香川蓬洲新作

成相寺觀世音靈驗記

竹亭春子太夫
章
豐澤新左衛門

西國二十八番札所

成相寺觀世音靈驗記傘松茶店の段

ふだらくや。岸打波は三熊野の。第一番の札所から二番三番順々に。二十八番の御靈場丹後の國成相の。觀音菩薩の靈驗は。いやちことこを聞わける。十八町の山阪を登り下りの足休め、雨舎りにも傘松の。茶店につどひ來る人の。絶間は更に内儀の愛嬌。汲んで出す茶も溢からぬ。茶碗でんでに取上げて。いやこれ皆の衆。この茶店の繁昌も。觀音様のお庇蔭なれど。一つはかゝ衆の愛想のよい爲め。さうぢやども。忠作殿の云はしやる通り。女に愛嬌がなうては。砂糖に甘味のないやうなものぢや。ほんに愛嬌と云へば。お源婆の處のお袖殿。連合の難病を癒したさに。毎日々々觀音様へ願詣で。鬼婆の子に彼のやうな優しい娘があらうとは。お釋迦様でも御存じあるまい。サイヤイお袖殿の爺親は。元は宮津で歴々の商人。お乳母日傘で育て上げたお袖殿。琴三味線から香茶の湯。女の道の一通り。教へこんだ其上に。まだ行儀作法を見習はせやうと。出石の御家中へ侍女奉公。其後爺親は急病でがつくり往生。跡に残つたアノお源殿は。夫の存生中から大酒呑み。夫のみか女だてら。博奕が好きで僅かの年月に。飲むと打つとで財産を減し。今では町外れで詫しい暮し。其貧乏も厭ひなくお袖殿は。夫の看病の片手

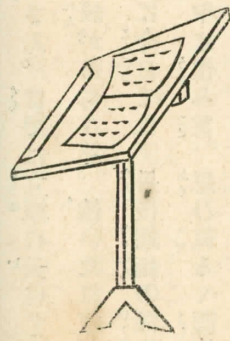
に。娘子達へ琴の指南。藝が身を助けて居る今の有様。何と不便ではござらぬかと。ほろりとこぼす一ト雫。涙の雨に傘松の。茶屋の女房も鼻つまらせ。まだお年も若いのに。一日かゝる御参詣。よくよくの心願でござりませう。サ、其心願と云ふのは。去年お屋敷から連れて戻つた。戀男の作次郎殿の。蹠を本復させたいと。女の一念貞節の志し。お袖殿の心では。當人の作次郎殿にも。参詣がさせられたら。うが。蹠では及ばぬ事ぢや。そこを思ふて此忠作は。蹠車をこしらへさせ。内にちやんと置いてござる今にもお袖殿が下向をして来られたら。其事を云ふて喜ばせ。私か内まで連れ立つて歸り。アノ車を挽かせて歸らせようと思ふのぢや。と聞いてお松は感じ入り。夫れは善根奇特な事。と云ふを打消し。何の。奇特も善根も其實は。知つての通り私の娘は。お袖殿を師と頼み。毎日々々琴の稽古ころりんしやんと忘れても。深切に教へて下さるので。何かな禮がしたいと思ひ。フト思ひ附いた蹠車。作次郎殿を乗せてアノお袖殿が。此山阪を挽いて登らうものなら。夫れこそ昔の蹠勝五郎箱根山の初花を其儘であらう。佛の功力は廣大無遍。お袖殿の信も届き。作次郎殿も今に全快さつしやるであらうぞや。ほんに私等も此様にお参りはして居るが。觀音様の御縁起を委しう知りませぬ。コレ忠作殿。こなたは評判の牛のお尻。何でも知らぬ事はないとの噂。成相寺の御縁起を説いて聞かせて下さらぬか。オ、聞かさうとも。勸むる功德は何とやら。さらばこゝで辻談義。縁起を説いて聞かせませう。そんなら聴聞々々と。みな。床几に行義よく。腰打掛けて畏まる。忠作は勿體ぶり。エヘン。抑も丹後の國興

謝の郡。成相山正觀世音菩薩の。由來をこゝに尋ねれば。頃は人王四十二代。文武天皇の御宇。慶雲元年の秋の夜に。當寺の開山眞應上人。佛の靈夢に丹州の。山路を深く分け入りて。靈地を索ね此處彼處。さまよひたまふ時しもあれ。一人の老僧忽然と。出現まし。一體の正觀世音の尊像を。授けたまひし其所が。即ち今の御堂の地。其後養老二年の冬。大雪しきりに降積り。往來も途絶へ上人の食する糧米も盡き果て、飢渴の餘り御命も。既に危ふく見わたる折しも。一疋の鹿草庵の。扉の前に來たりしと。思ふ間に早や斃れ死す。上人不思議と立寄りて。つくつく鹿を見たまへば。之ぞ正しく三種の淨肉、我が飢を救はん爲めかと、其鹿の股をさき。食したまへば精神すしく。氣力も疾みに増し來たれば。コハ唇けなし之れとても佛の加護と佛間に至り。觀音菩薩の尊像を。見奉つればアラ尊とや。木像の御股より。鮮血淋漓と流れ居る。扱は菩薩が鹿と化し。我が飢渴を救ひたまひしか有難や唇けなや。と三拜九拜懺悔の念誦を修したまへば。不思議なるかな靈像の。傷口癒わて元々に。なれ合しより御寺の。其名を今に成相と。稱ふる事となりける。何と解つたか。有難い謂れを聞き。猶更信心する氣になつた。其有難い觀音様を信心する娘に引かへ。強慾非道なお源婆。現在産みの娘に隔て心。譬へにも云ふ通り。嫁と名が付きや我子も憎いのであらう。サイナア。婿の作次郎殿を抛出して。金のある跡釜を据る魂膽は博奕場で。うま合の丑松めを味方に引入れ。碌な事は仕出かすまい。イヤモ女の癖に博奕を打つて。いつも財布は唐草模様。併し財布を空にするのは此地の名物。ソレ聞かんせ。二度と行くま

い丹後の宮津。縞の財布が空になるアハ、ハ、ハ。オホ、ハ、ハ。ア、コレ長太。こなたは其處で何を
 居るのぢや。私は今此方衆の話しを聞いて。恐れかんしんの股くぐりではなうて。股の間へ斯う首を
 入れて。日本三景の其一つ。天の橋立の景色を見て居るのぢや。アハ、ハ、ハ、爾うぢやあるまい。大方お山
 へ參詣をする。女順禮の股の間を。然うして覗いて居るのであらう。エ、馬鹿々々しい何を云ふのぢ
 や。アハ、ハ、ハ。オホ、ハ、ハ。つまらぬ話しに思はず長尻をした。歸りは文珠の名物。智惠の餅で腹ふ
 くらさうか。イヤ、ハ、ハ、こちは四軒茶屋の名物。でんがくを肴に熱燗でキユーツと一杯。ア、此咽がゲウ
 くと催促するわい。忠作殿。こなたは此處でお袖殿の。下向を待つて連立つて歸らつしやれ。跡に残
 つて私等の茶代。一蓮たくさん頼みます。こちらはお先さへ歸りますと。勝手な事をしやべりつ、我家
 々々へ立歸る。テモあつかましい人達ぢや。と眩きながらすつばすつば。煙草くゆらし居る處へ。順禮な
 らねど笈摺に。人目ごまかす奎平が。管笠片手に歩み來る。跡から此處へ。ちよこ、走り。重いお尻
 にゑじかり股。職女のお蛸がうろく眼。ばつたり見合す顔と顔。ヤア戀人か何故に。こゝ等で肩に笈
 摺は。もしや詠歌のひとつでも。唱へてやろどのお心かど。口には云へど心には。おほ、をかしき風情
 なり。成程爾う思やるもつとも。豫てそさまも知る通り。此奎平に首つたけ。惚れて居る。アノ
 おみつちや。同じ職女のそさまとの。中を知りつゝ無理な戀。何卒縁が斷りたいと。切戸の文珠へ願を
 かけ。手を切つて下されと。今も今とて參詣をして居る處へ。おみつちやが跡追ふて來たゆるに。そつ

と逃げて順禮と化けたのぢや。嘘ぢや、奎平さん。口では立派に云はしやんしても。おまへはアノお
 みつちやめに。まだ未練があらうがな。何の未練があらうぞ。飽いたればこそ此處まで逃げて來たのぢ
 や。そんなら眞實私と女夫に。サア夫れも互ひに今日では。丹後縮緬の織場の職人。時節を待つた其上
 で。エ、時節を待つてどはごうよくな。無情の君やと恨み言。思ひ亂るゝ葎簀かげ。それとおみつちやが
 走り出で。中を隔て、立柳立退く袂引止め。エ、聞かせぬ奎平さんそりや氣の多い悪性な。そもや
 二人の馴初めは。初めて宮津のお祭りに。葉越の月の面影はお武家さんやら。職人さんやら。知れぬな
 りふりでつぶりと。水ぶとりした大男。他のおへこは禁制と。えめて固めし肌と肌。主ある人を大膽な
 ことわりなしに惚れるとは。どんな處にもありやせまい。イ、ヤそもじとて親方の。許せし中でもない
 からは。戀は仕勝よ我男。イ、ヤ私がイヤわしがど。彼方へ引けば此方へ引く。中に奎平地團だふみ。
 マア、ハ、ハ、待つてくれ。さう兩方から引張つては。此奎平皺くちやになるがな。マア待つて。色男
 には何がなる。一人の男に二人の女房。此上は文珠の智惠をえぼり出し。鬮引にして何方なりとも。引
 當た方が本妻ぢや。エ、何を鬮繩にしようぞ。こうつと。オ、あるぞ。おみつちやもお蛸も。其ひ
 しごきを解いて貸しや。オットよし。此二筋の中ごちらかの端を。ア、コレ、見るなよ。結
 んである方を引き當た方が勝ちや。サア、目をふさいで此先きを確かりと持ちや。オット目を明く事
 はならぬ。サア引張れとひしごきを。結び合して二人に引かせ。其間に奎平をつと抜け。ぬき足さ

し足逃げ出す。縁の小田卷をそれならで。當りておみつちやが格氣もせず。男の跡を附けるとも。知らずお蛸もひしごきを。たぐり／＼て追ふて行く。いづこの里も戀なれや。道引違へていきせきと。阪道下るお袖の姿。忠作目早に。オ、お袖殿か。待つて居ました。オ、これは忠作様。今から御參詣でござりまするか。イ、ヤ爾うではない。いつも娘がお世話になる。お禮と云ふもをこがましいが。こなたが夫の作次郎殿を。乗せる爲めの躰車。私が處に拵へてござる程に。婆さまの機嫌のよい時に。作次郎殿を其車に乗せて。せめてお山の麓までなりとも。夫婦諸共に參詣をさつしやれ。と情けも籠る贈り物。お袖は嬉しさ涙含みエ、有難う存じます。去年の秋から夫は躰。悲しい時の神頼み。佛いちりに成相の。觀音様へ願籠めも。どうぞ本復させたいばかり。つれない親の氣を兼ねて。日毎々々の徒歩詣で、何の驗しもあらざるは。まだ信心の届かぬかと。嘆きかこつぞ道理なる。オ、正理ちや／＼。併し信心すれば徳はあるもの。まだ問ひたい事もあるが。下向の道すがら話しませう。コレか衆。茶代はこゝにど懐中から。取出したる四文錢。御門の方をふり返り伏拜みつゝ、兩人は。麓をさして歩み行く。



青瑠璃漢述

安宅關講義

勸進帳の段

安宅關講義

勸進帳の段

青瑠璃漢

第一回

これは信光作の謠曲を本にして、淨曲に書直したもので、二代白猿だともいひ、然らずとも云ふが、市川家の十八番となつてゐるのは諸君の御承知であらう。謠曲の錆色なのに引換へ、殊に問答の處などは光澤づいてをつて、慥に一部の史劇として尊重する價はある。作文も頗る能く出來て、手直しの効も亦没すべからざるものである。先代廣助が絲調べで大に良くなつたが、まだく錯雜紛糾してをるとて、先年緒方夢蝶氏が猿系に命じて、嚴密な絲調べをさせて、花蹊、二葉、花薰などの諸氏が盛んに語られたものであるさうな、こたび略解を試みるこゝとなつたから、希くば斯道家諸君も、この史的淨曲を將來盛んに唸りたいのである。

尙假名遣ひやら。語句の修正にもいさゝか注意して置いたから多少の參考にもならば余の面目である、筋は源義經主従十二人が偽山伏となつて、安宅關を伴り通過したといふ、義經勳功記や、成長私記の説を脚色したことは明白な事であつて、武藏坊が智勇忠節を發揮したものである。

旅の衣はすゝかけのく。露けき袖やしぼるらん。

旅の衣は涼しいと掛けたのである。すいかけは山伏の服に被るもので、鈴掛とかくのである。此の枕は謠曲の地であつて、此の次へ鴻門楯破れ、都の外の旅衣、日もはるく、越路の末、思ひやるこそ遙なれどつゞけてある。

時しも頃は如月の都を出て義經公。ならはせ玉はぬ旅姿。身は山伏の強力こやつす心を痛はしき。

如月は二月のこと、強力は荷持と見て差支ない。

扱御供の人々には。伊勢の三郎。駿河の次郎。片岡八郎。常陸坊海尊。武藏坊辨慶は先達の姿こ成り。

伊勢三郎は義盛といつて四天王の一人である。駿河の次郎は清重といつて竹の下次郎ともいふた。片岡八郎は弘常又は爲春ともいふた。海尊は元園城寺の僧で、後に仙人になつたといふことだ。この外に増尾十郎兼房も居た。いづれも一騎當千の義經が近侍である。先達とは山伏となり峯入すること三度に及ぶと、四度目には先導者となつて、新參者を引率するのである、よつて先達といふのだ。

海津の浦を跡に見て。花の安宅に着にける。

海津は近江國高島郡に在る所で、越前へ出る順路である。安宅は加賀國能美郡安宅町の事で、小松を去ること西二十餘丁である。安宅關は八雲御抄にも見えて、鎌倉時代の新置ではないと云ふ説で、古の關趾は二三里の海中に在つたと、三州名跡志に見えて、即ち百年以前まで松の古木が在つたと書いてゐるが疑はしいと云ふことだ。そこで花の安宅といふことには大に余の議論がある、なせかといふに花といふ縁語がこの淨曲には入用でない、謠曲ではあししの篠原波よせて、靡く嵐のはげしきは花の安宅に着にけりとある。これは嵐は花の仇敵であるから、今義經の爲に仇たる兄の頼朝になぞらへ、弟義經を花に比した作意であるのだ、靡く嵐とは四海に威風をなびかせる頼朝のことであるのだ。然るに淨曲では何等花の縁語なくして、花といふ字を安宅に冠らせたのは大失策で、花の名所でない安宅關には木に竹を接いだよりも不釣合だ。これを見ると淨曲作者の方が、謠曲作者よりズツと劣つてゐる。故に此處は安宅の關に着にけると直した方がよからう。

辨慶關の戸に聲を通じ。イカニ關守殿に物申さん。我々同行山伏は忝くも勅命を受。南都東大寺大佛殿建立の爲諸國を勸進する客僧也。此所を通行致したしイザ開門有と云入れば。

大佛殿建立云々は、治承四年平重衡の爲に兵火に焼かれたのを再建すると云ふこと、勸進は寄進を勸むること、客僧とは東大寺より派遣したる僧なればかくいふのである。

富樫の左衛門詞をかけ。ノウウ〜客僧達我は當所の關主富樫の左衛門正廣と申者。此頃頼朝義經公御中不和と成せ玉ひ。義經公は偽山伏と成て。

この條は左衛門のいふ詞で、讀むで字の通であるから解釋するまでもない。

奥州御館秀衡に便り玉ひ。下向有由聞し召及ばれ。斯の如く國々に新關を構へ堅く詮義を仕る。譬へ誠の山伏にもせよ。修驗者に限りいつかな通路成難し。がたつて關を通るゝ有ば身の上にも及ふべし早々爰を立去られよ。

奥州御館云々は、藤原秀郷九代の孫陸奥守兼鎮守府將軍秀衡の事である。始め義經、牛若丸時代に金賣吉次に伴はれて秀衡の所へ行き、成長して兄頼朝の義舉を聞かや、宗徒の者を俱して兄の軍に投じ、百戦功成りしに今や不幸兄の忌む所と成り、再び秀衡の處へ行くのである。修驗者は山伏の事である

身の上にも及ふべしは、御前達の身の上の爲に悪い仕合に成らうも知れぬとの意である。

是は近頃迷惑の候。夫は作り山伏をこそ止めこの仰成べし。誠の山伏を止めよこの仰にはよも有まじ。

作り山伏は偽山伏のことである。

ア、ラむづかしの問答無益なり。一人も通す事罷成ぬと言放す。

この條字の如し、何等不解處ない。

こなたははつと力を落し。ア、ラ頼なや力なし。いでや最後の勤をなさんと同音に夫山伏といつば役の優婆塞の行義を受け即身即佛の尊體を爰にて打留玉はん事明王の照覽明らかく熊野權現の御罰當らん事立所において疑ひ有べからず。おんあべらうんけんご珠數さらくご押もんだり。

最期の勤は終局の手段のこと、役の優婆塞は役の行者小角のことで、此の小角は大和國葛上郡芥原村の人で、藤葛を衣とし、松菓を食ひ、鬼神を驅使して給仕せしめ、文武帝の大寶年間入唐して終に

歸らなんだものである。優婆塞とは俗體で佛道を修むるもの、名である。行義はその主義行道のこと
即身即佛はその身即ち佛なりといふ意。明王は不動明王のこと。熊野權現は山伏の參る神なれば、此
處にいへるのである。かんあべらうんけんは、庵阿毘羅呼缺で、大日如來の眞言でおんとは歸命の意
あべらうんけんは地水火風空の意である。

富樫の左衛門詞を正し。近頃殊勝に存じ候。先刻承り候へば南都東大
寺大佛殿建立の勸進を仰有し、定めて勸進帳を御持參ならん是にて
聽聞致すべし。イザ勸進を召れよと望む詞に。

殊勝は奇特の行といふこと、南都は大和國奈良のこと、勸進帳は寄附帳で、即ち寄附の趣意書のこと
である。

辨慶ははつと思へどさあらぬ躰。元より勸進帳のあらばこそ。笈の内
より往來の卷物取出し勸進帳と號けつ、高らかにこそ讀上げけれ。

さあらぬ體は然あらぬ體で、そしらぬさまのこと、笈は雜物を入れるもので背に負ふ所のもの、往來
の卷物は庭訓往來とか、百性往來とか云ふやうな、通俗的の書牘を記した卷物のことである。高らか
にこそ讀上げけれこの句はこそとかけてれと結んでをる、淨曲はこそと係つても、メツタに文法通り

に結ばれて居ないのこれはまた珍らしいことだ。

それつらくおもん見れば大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隠れ。生死
長夜の長き夢を驚かすべき人もなし。

おもん見ればは思ひ見ればである。大恩教主は釋迦牟尼佛のこと、秋の月は佛徳の圓滿なる譬で、涅
槃の雲に隠れば入滅を雲がくれといつたまで、生死長夜の云々は迷の心を譬へたのである。

爰に中頃の帝最愛の後死別れ玉ひ。涕泣の御涙ははく時なし。かるか
ゆにに盧遮那佛を建立し俊乗坊澄源諸國を勸進す。一紙半錢と云へど
も奉財の輩は無比のたのしみを極む。歸命頂禮敬つて申す。天へも響
けと讀上たり。

中頃の帝は聖武天皇の御事で、かはく時なしはかわく時なしの假名違ひであらう。盧遮那佛は光明
遍照又は淨滿など云つて大佛のこと、俊乗坊は法然上人源空の弟子で、入唐した僧である。此の人に
は面白い材料がたんとあるが、爰に書く、否喋る必用はない。一紙半錢は僅少なる金品のこと、奉財
の輩は寄附をした者のこと、歸命は命を佛に歸するといふ意。頂禮は頂上禮拜の意である。(此項終り)



會 告

本回第一回淨瑠璃大會の儀本月開催すべき筈の所役員其の他に於いて差支有之候間來月初旬に延期致し候追て其の節御通知可申候也

近 松 會 演 藝 部

會 告

右は今回解雇致し候間今後本會に關係無之候也

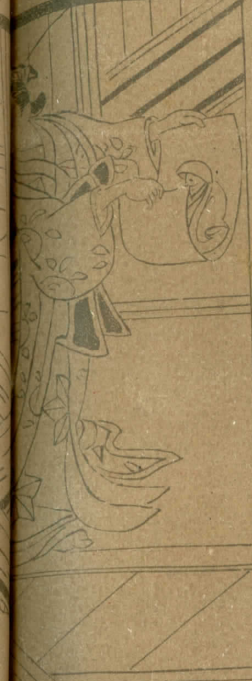
事務員 和田 次郎

追て雜誌編輯人及發行目を變更し代理部の業務も本會事務所にて取扱申候尙山田勇藏氏を事務員として任用致候間併せて會告仕候以上

近 松 會



近松會雜誌 第六編



近松會雜誌 第六編
竹本義太夫
阿波鳴門
又切物



太夫 竹本義太夫 座本 近松門老衛門

第十
三味線
竹本義太夫
座本 近松門老衛門

第六
真合
竹本義太夫
座本 近松門老衛門

第二
真合
竹本義太夫
座本 近松門老衛門